

不思議な蕎麦屋の会

1 「不思議な蕎麦屋の会」の趣旨・目的

直木賞作家 長部日出雄氏の千厩町小梨黄金山の麓を舞台にした短編小説「不思議な蕎麦屋」。この小説では忽然と消えた蕎麦屋に「不思議な蕎麦屋さん、出てきてください！」と呼びかけて結んでいる。本会はこの小説の呼びかけに応えることを出発点とし、いろいろな可能性を秘めた「蕎麦」を題材にした取り組みを行い、地域や組織の更なる活性化とその取り組みを内外に発信していくことを目的に平成12年の夏に発足しました。

2 本校との連携

平成14年の新生千厩高校誕生の年、「不思議な蕎麦屋の会」の方から「蕎麦を作ってみませんか」という提案があり「ぜひお願いしたい」とお願いしたことから始まりました。それ以来、生産技術科の1・2年生全員に対して栽培指導からソバ打ち体験まですべてにおいて御指導いただいています。それぞれお仕事もあり忙しい中で毎年お願いしています。

3 短編小説「不思議な蕎麦屋」とは（あらすじ紹介）

蕎麦が好きで好きでしかたがない主人公の作家。彼にとっては蕎麦はいくら食べても飽きずにこれほど旨いものはないらしい。五官のすべての働きを必要とする食べ物は世界中に蕎麦以外無いという。あるテレビ番組の取材で日本一旨い蕎麦屋の収録に出かけた。その先は岩手県の山の中。電話もなく連絡は取れない蕎麦屋。一行は地図を頼りに新幹線で一ノ関駅に向かった。誰も食べたことが無く噂でしか知らない蕎麦屋。電話も無く人伝いの地図だけが頼りだ。一ノ関駅からは大船渡線で千厩駅へ向かう。機材を乗せたワゴン車と千厩駅で待ち合わせた。山奥の蕎麦屋は「一番いい蕎麦がとれる土地を探して日本中を渡り歩く流れの蕎麦屋」らしい。駅からのワゴン車とタクシーは黄金山の麓に向かった。車を止め、山の奥へ奥へと歩いていくとひっそりと一軒の農家があった。主人は「蕎麦は出すが作る課程の撮影は一切お断り、私も役者では無いので画面にはでない。食べているのを撮るのはそちらの勝手。」という。蕎麦を作り終え初めて姿を現したのはまさに絵に描いたような孤独な学者か研究者、または孤高の修行者かといった風貌であった。蕎麦をすすりこむ。半信半疑だった感想は一瞬のうちに確信にかわり、たちまち目に涙が溜まるほどの感動のクライマックスに達した。「まさにこれは日本一！」心の底からわき上がる実感であった。放送は大講評だった。「作家」という肩書きのおかげでヤラセでも何でも無いことは証明された。多くの人が蕎麦屋を探し求めたが蕎麦屋が無いという問い合わせが殺到した。取材した者が訪問しても家は影もかたちも無くなっていた。トラブルが大きくなる前に「信州に日本一の蕎麦屋発見」という番組が放送された。どうも家の雰囲気も主人の風貌も千厩の蕎麦屋とほぼ同一であった。いったいこれはどういうことなのか。このままでは私はヤラセの疑いをかけられてしまう。主人公は呼びかけた「不思議な蕎麦屋さん、出てきて下さい！」